

令和三年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日(午後) 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は18ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

河童や小鬼などが町中にいた時代、小説家の「私」綿貫征四郎は湖での事故で死んだ友人・高堂の家の管理をまかされ、犬のゴローと共にそこで生活していた。家にある湖の掛け軸からはしばしば死んだ高堂が現れ会話を交わしていたが、それを知った編集者に高堂の住む世界について書くよう頼まれる。しかし「私」は馴染みのないことを言葉に表すことができず難儀していた。

空気が重い。今にも雨が降り出しそうだ。座敷から外を眺めると、サルスベリの花がいくつかほころび始めているのに気づいた。そういえば、初めて高堂がやってきたのもこんな日だった。あの日は夜になって風雨が激しくなり、硝子戸が恐ろしいぐらいに音を立てていた。思い出しながら外を見てみると、硝子戸に映っている風景が室内と少し違うと気がつく。よく見ないと分からないが、透き通ったその風景はどこかの野原だ。今までもずっとこのように違っていたのか、それとも今までは穏当に此方の景色を映して、何かの事情があり突如として彼方の景色に変わったものなのか。また、自分は知らぬ振りをしていた方がいいのか、やはりそれとなく気づいたことを知らせた方がいいのか、であるならそれはどのようにして、等々、考えて、悩む。

そのうち原稿の方に気持ちが悪くなってゆき、硝子戸のことも忘れ、気がいたら暗くなりかけていた。勝手に立ち、飯を炊き、鮎の干したのを戻してつくってあった甘露煮と貰い物の塩からで食事をする。それから銭湯へ行き、帰ってきて調べものをした後、喉が少し渴いていたが構わず就寝。

夢の中で和尚の山の辺りを散歩している。草地をゴローが先を行く。いつしか今まで来た覚えのないところへ出る。楽隊の音が微かに聞こえる。それに引かれて山を越し、また一つ越しというように、彷徨うが如くただ聞こえてくる音を頼りに山をゆく。次第に下りばかりになってきて、こんな谷地があっただろうか、と訝りつつ、どうせ夢だから、とどこかで()をくくっている。益々急な下りだ。少し緩やかになったと思ったら、また下りが始まる。両側からは切り通しのような崖が迫っている。ゴローは余程先を行っている。林に入る。景色は次第に群青色を濃くしゆつくりと暮れなずんでゆく。もう随分な低地のはずしかるに空気はいよいよ清澄さを増し、木々の幹は柔らかく温和しく淡々と、楽隊の音はその林の奥から流れてくる。のみなら

ず人のざわめきまで微かに伝わってくる。こんなところで何かの集会でも開かれているのか、と更に訝る。夢だということをつかり失念している。楽隊の奏でる西洋音楽は、どこか物憂く懐かしく優しく、集会であるにしてもよほど高尚な趣味人の集う場であることが察せられ、Aを両方抱えつつ歩を進める。辺りは月明かりとも星明かりともつかない不思議な明るさを秘めた董の暮色を深めてゆく。手入れされた落葉松の林。それとも高地にあるような自然の抑制が利いて手入れの必要がないのか。

ゴローが先の方で見えなくなる。こちら足早になり、追いつこうとする。すると更に丘を下るような勾配があり、その先は明るさと昏さを混ぜ合わせ、底光りするようなその度を益々深めた、広場のようだ、木々が疎らになっている。楽隊の音はここから流れてくる。思い思いの洋装をした男女が、ある者は寝椅子に横になり、ある者は揺り椅子に腰掛け、また彼方へ一塊り此方へ一塊りと、花の房を無造作に散らすよう、硝子の杯を片手に談笑している。中央に大きな円卓があり、季節ならぬ果物、葡萄がこぼれんばかり置いてある。喉が渴いていたので、私にはその大きな葡萄の粒がたいへん魅惑的だ。広場へ足を踏み入れてゆく。人々の間を行くのだが、まるで林の中を行くのと変わらぬ自然さだ。通り過ぎざま、皆は此方を承知している証拠に少し目を伏せるぐらいで、誰も咎め立てはおろかじろじろと見るものもない。

円卓の周りには数名が椅子に座り、Iと食事をとっている。ナイフやフォークも散見するが、皿の上のものは私の食生活からは見当もつかず何とも判別し難い。近づくとこのときはさすがに皆此方に顔を向けた。空いている椅子はある。が腰掛けていいものかどうか。周りが微かに頷くようにした、と思ったので、恐る恐る座る。

さあ、葡萄だ。此処が思案のしどころだ。こういう異界の食べ物に口にしてはいけないと、古今東西の伝説が教えているではないか。それを敢えて無視するのなら、小なりと雖も蓄えた教養が泣く。艶やかに手招く葡萄は赤紫。露を帯び、こぼれんばかりの房が円卓の中央を飾っている。

——お食事はまだでした？

斜め向かいに座る、妙齢を少し過ぎたぐらいのご婦人が囁くように訊く。

——今お着きになったばかりですから。

その隣の、カイゼル髭を蓄えた中肉中背の男性が、私の代わりに婦人に答える。

——誰か給仕に。

反対に座る、私と同じぐらいの年回りの男が向こうに声をかける。私は慌てて、

——いえ。御懸念には及びません。腹は空いてないのです。

どういうわけか、ここでさざ波のような笑い声が一齐に起こる。笑われているのだが、不思議に嫌な気はしない。ああ、そう
だ、と思い立ち、

——犬を見ませんでしたか。飼いだ犬を追ってきたのですが。

——此処には犬はいません。

妙にきつぱりと最初の婦人が答える。そんなはずはない、と声を上げようとすると、

——さあ、葡萄をどうぞ。お腹は空いておられなくとも、喉はお渴きのはず。

それはその通りなのだが。一瞬周りがしんとして私の動きを注視したように感じた。これはいよいよ怪しいと、

——私は、帰らねばならんです。

——何故です。

と、先ほどのカイゼル髭が面白そうに問う。何故と云って……私が思わず答えに窮すると、

——此処にいればいいではないですか。此処はまだほんの入り口ですが、奥に行かれますとそれは素晴らしい眺めです。虹の
生まれる滝もあれば、雲の沸き立つ山脈もある。金剛石で出来た宮殿もある。そこに住まいする涼やかな精霊たちもいる。心穏
やかに、美しい風景だけを眺め、品格の高いものとだけ言葉を交わして暮らして行けます。何も俗世に戻って、卑しい性根の俗
物たちと関わり合って自分の気分まで下司に染まってゆくような思いをすることはありません。

思わず引き込まれそうになる。カイゼル髭はいよいよ優しく、

——さあ、葡萄を。

しかし、何かが私の手を動かさない。私は黙ったまま動かなかった。随分時間が経ったように思った。私は思いきって口を開
いた。

——拝聴するところ、確かに非常に心惹かれるものがある。正直に云って、自分でも何故葡萄を採る気にならないのか分から
なかつた。そこで何故だろうと考えた。日がな一日、憂いなくいられる。それは、理想の生活ではないかと。だが結局、その優

雅が私の性分に合わんのです。私は与えられる理想より、刻苦して自力で掴む理想を求めているのだ。こういう生活は、

私は、一瞬躊躇ったが勢いが止まらず、

⑤ 私の精神を養わない。

言い切ると、周りはしんとした。カイゼル髭は気の毒なぐらいに真っ赤になった。怒りのためというより戸惑いのせいのようにだ。

⑥ 私は……。

カイゼル髭は何か云おうとしたが、一瞬泣きそうにして黙ってしまった。

——では、失礼。

私は立ち上がり、一礼して踵を返し来た道を歩いた。いつの間にかゴローが再び前を歩いている。心中秘かにほっとする。ゴローがいなければ帰り道が分からない。

……遠くから微かに夜行列車の汽笛が聞こえる。

Ⅱ した輪郭の向こう側で、意識がこれは夢だと再び告げる。外は雨が

降っているようだ。雨の日は汽笛が良く聞こえるのだ。意識は幽明の境にあって今ならまだ夢に戻れそうだ。私の中の何かが、向こう側に引つかかっている。雨の気配が障子を通して室内を侵してゆく。……そうだ、あのカイゼル髭の泣き顔だ。弱くて優しい人なのだ。それなのに私は随分力任せにあの人をはねつけたような気がする……。

雨は音もなく降っているが、時折破れた雨樋から雨滴がまとめて落ちるのが聞こえる。私はただそれを聞いている。次第にそ

れが遠く微かになってゆく。最初は草原だった。ゴローが出てきて先を行くのだ。そうだ。そしてどこまでも下ってゆく。切り通しがある。そうだ。楽隊の音が聞こえてきて……。広場だ。私は真っ直ぐに円卓に向かって歩いた。先ほどと全く同じしつらえ。カイゼル髭は何事もなかったかのように穏やかな顔をして此方を見ている。

——先ほどの件ですが。

私は何よりも先にそのことを伝えようとしている。

——お心遣いは有り難いと思っております。私はあなたを否定するつもりは毛頭なかった。それどころかあなた方に憧れる気持ちさえある。さつきは少し、自分に酔い、勢いを付けなければ誘惑に負けそうだった。だがそれは大変失礼な態度でもあったと

帰ってから分かった。言葉足らずですまなかつたと思っています。私には、まだここに来るわけにはいかない事情が、他にもあるのです。家を、守らねばならない。友人の家なのです。

カイゼル髭は目を閉じてにっこり頷いた。隣のご婦人が、

——そのことに気づいたのだわ。

と、扇子を口に当て、驚きを込めたひそひそ声で周りに囁く。向かいの紳士も、

——良く覚えていて戻ってきた。

(注) ちようじよう
——重畳、重畳。

皆に安堵と優しさの波が拡がってゆく。私は葡萄を見ながら、**B** と思っている。ふと、はて、ここは夜なのか昼なのか、という疑問が頭を掠め、空を見上げる。すると空は月長石で出来た巨大なレンズのよう、まるでこれは水の面、此処は水底の国のようではないか……湖底か、と思う。

今度は **III** 雨滴の音が聞こえた。枕の横に小倉袴の膝が見える。高堂だ。そうだ、ときがくれば、と云っていた。今夜がそのときだったか。

高堂は低い声で、

——行ってみれば何ということはなかつたらう。

と、呟いた。そうか **C**、と思った。同時に、これで書ける、とも。

高堂は立ち上がり、歩いて行つた。掛け軸の向こうで帰る音がしている。

——また来るな？

私は追いかけるように寢床から声を上げ、念を押した。

——また来るよ。

その声はすでに遠く、微かに響いた。まるで自分の放った声が、彷徨う木霊となり、いくつもの国境に戸惑いつつ、ようやく帰り着いたかのようにだった。あとはしんとしている、しんとしている。

もう一度目を閉じた。

(梨木香歩『家守綺譚』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) カイゼル髭……ドイツ皇帝ウイヘルム二世風の、両端がはね上がった八の字形の口ひげ。



(注2) 重畳……上出来であること。

問一 — 線① 「() をくくっている」とありますが、「大したことはないと見くびっている」という意味になるように、空欄に入る適当な一語を答えなさい。なお、漢字でもひらがなでも構いません。

問二 空欄 A に入る「私」の心情として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 充足感と不足感 イ 興奮と恐怖心 ウ 期待と落胆 エ 好奇心と不安

問三 — 線② 「季節ならぬ果物、葡萄がこぼれんばかり置いてある」とありますが、この文章全体におけるこの一文の効果として、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」を安楽な生活へ誘惑する役割 イ この世界が魅力的な空間であることを示す役割
ウ この場所の異質さを象徴する役割 エ 「私」の心の正しさや清らかさを試す役割

問四 — 線③「教養が泣く」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 知恵や知識が無駄になること
- イ 常識はずれの愚かな行いであること
- ウ 常識や先入観をあえて捨てること
- エ 教育を受けていないと批判されること

問五 空欄 I Ⅲ に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返し用いてはなりません。

- ア ぼんやり
- イ はつきり
- ウ ゆったり
- エ すつきり

問六 — 線④「それは、理想の生活ではないかと」とありますが、「理想の生活」の内容が最も具体的に書かれている一文を本文中から探し、初めの三字を抜き出して答えなさい。

問七 — 線⑤「私の精神を養わない」とありますが、

(1) 「精神を養う」とは、ここではどのような意味ですか。自分の言葉で十字以内で言い換えなさい。

(2) 「私」にとって「精神を養わない」生活とは、どのような生活ですか。「精神を養う」生活との違いを踏まえて四十字以内で答えなさい。

問八 — 線⑥「私は……」とありますが、このときのカイゼル髭の気持ちはこのようなものですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の意見を「私」が受け入れると予想していたのにすぐさまはねつけられたため、憤りとともに大きな失望を抱いている。

イ これまで礼儀正しく大人しかった「私」が突然ひどく失礼な態度をとったため、その変わりぶりに驚き悲嘆にくれている。

ウ 自分の意見を「私」がこっぴどく否定するとは思ってもみなかったため、ひどく動揺してどうしたらよいか分からなくなっている。

エ 「私」の発言を聞いて、これまで自分がずっと考えていたことは間違っていたと気が付いたので、とても恥ずかしくなっている。

問九 — 線⑦「心中秘かにほっとする。ゴローがいなければ帰り道が分からない」とありますが、このあと「私」はすぐに帰ることをせず、もう一度元の場所に戻ります。それはなぜですか。二十字以内で答えなさい。

問十 — 線⑧「次第にそれが遠く微かになってゆく」とありますが、どういう状態を表しているのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夢の記憶がだんだんうすれてゆき、ようやく現実の世界へ戻ってきた状態。

イ いったん覚醒するも再び考えがはっきりしなくなり、まどろんできた状態。

ウ 現実での雨滴が落ちる音から意識が離れてゆき、また夢に戻っていく状態。

エ 夢の記憶に集中していて、雨が降りつづく音が聞こえなくなっていく状態。

問十一 空欄 B に入る「私」の思いとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不愉快ふゆかいだな イ 美しいな ウ 食べればよかったな エ 胡散臭うさんくさいな

問十二 空欄 C に入る「私」の考えとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア こいつは葡萄ぶどうを食べたのだ イ こいつは生きているのだ
ウ こいつとはもう会えないのだ エ こいつは私と同じなのだ

問十三 本文の内容として正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 朝起きてゴローと散歩していた「私」は不思議な集会を発見し異世界に迷い込んでいたことに気が付いたが、その人々との会話を通して自分の理想の生き方について再確認した。

イ 目が覚めるまでの「私」は夢の中にいることを常に意識しながら行動しており、そこに住む人々の価値観に戸惑とまじうことはあったが自分の信念を捨てることはしなかった。

ウ 「私」は夢の中で高堂と出会ったが、高堂が住む夢の世界での生活は「私」の考える理想の生活とは異なっていたため、高堂と別れて現実世界に帰ることを決めた。

エ 高堂は「私」が夢で訪れた異界の住人であるが、これまでも「私」の前に現れたことがあり、今回初めて異界に行つた「私」が戻ってくるのをこの世で待ち受けていた。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

はじめにひとつの質問をさせてください。

「昔話はどこにありますか」

この問いに対して、読者のみなさんはなにを思いうかべるでしょうか。昔話絵本に書いてある、あるいは昔話の再話本に書いてある、図書館に行けば本の形でならんでいる、というふうなことを思いうかべるかもしれません。けれども、私のこれまでの昔話研究、および昔話調査の体験からすると、昔話がほんとうに存在するのは、それが語り手によって語られている時間のあいだだけなのです。ということは、語り終わると、昔話は消えてしまうものです。つまり、昔話は厳密に時間についた文芸であるということができません。

創作の文学も、そこに書かれている出来事は時間によって流れているし、それを読むには時間が必要ですから、ある程度は時間についた文芸であるといえるのですが、昔話のように耳で聞く文芸は、きわめて厳密に時間についた文芸なのです。それは(A)と似た性質をおびてきます。昔話は、時間についた文芸であるという点で(A)と非常に似た性質をもっています。

昔話のことを考える場合には、「昔話は時間的文芸である」ということが、すべての基本になると思います。昔話を楽しむときにも、昔話を研究するときにも、あるいは昔話の絵本を作るときにも、また昔話の再話本を作るときにも、このことはけつしてわすれてはならない基本的性質です。

私は、昔話の研究をしているうちに、昔話の語りには一種独特の法則があることに気づきました。その法則というのは、昔話が口で語られ、耳で聞かれてきたために獲得^{かくとく}してきた法則だと思えます。

この語りの法則は、ほとんど昔話の文法と違っていいものです。文法というと、あるいは英語や日本語の文法を思いうかべる人もいるでしょう。考えてみると、私たちは日本語をしゃべるときに、日本語の文法など意識してはいません。生まれてから覚えてきた言葉をしゃべっているにすぎません。ところが、研究者がそれを整理して、そこに流れている共通性を調べてみると、ひとつの大きな法則があるということがわかってくるわけです。そして、それは下一段活用とか、上一段活用という形で特徴づけられます。昔話の語り手も同じです。文法などにも考えずに、むかし聞いたとおりに語っているのです。それを研究者がた

くさん集めて整理してみると、そこに共通の法則があるということになるのです。だから、昔話には文法があるといえます。

昔話には、^②昔話の文法があるばかりではなくて、^③昔話独特の言葉づかいもあります。それは昔話の言葉づかいといってもいいし、文学になぞらえて、文体といってもいいでしょう。しかし元来昔話は文章として書かれたものではないので、ほんとうは文体という言葉はあまりふさわしくありません。表現法というほうがいいのかもしれない。けれども、これもあまりに漠然^{ばくぜん}としています。むしろ、「語り口」というのがもつとも適切な表現のように思います。とにかく、昔話にはある独特な語り口があります。よく「昔話には荒削^{あらけず}りのよさがある」とか、「昔話には独特の味わいがある」とかいいますが、それには昔話もっている独特な語り口が深くかかわっているのです。

私の考えでは、昔話の文法と、昔話独特の語り口と、昔話全体の構成を合わせて、昔話の独特の「語法」とよんでいいと思います。

私が昔話の語法を強く意識し、そしてそれはひとつのまとまった論になりうると考えるようになったのには、研究者としての三つの体験があります。

私は大学時代からグリム童話の研究をはじめ、修士論文でもグリム童話の成立史についてのくわしい研究をしました。そのうちに、スイスの文芸学者マックス・リュティが一九四七年に発表した『ヨーロッパの昔話 その形式と本質』という本に出会い、それを翻訳^{ほんやく}して日本に紹介^{しょうかい}しました。それ以来、マックス・リュティ自身から個人的にも親しく教えを受け、彼の最後の著作である『昔話 その美学と人間像』（一九七五年）も翻訳しました。この二つの論文の翻訳と、リュティ自身から教えてもらったことよって、私はリュティのメルヒエンに関する様式理論をくわしく体得^{たいとく}したと思っています。

私は、リュティ理論を学ぶとともに日本の昔話の調査も行うようになり、現存するすぐれた語り手たちに出会いました。そして、たくさんの語りを聞かせてもらっているうちに、活字では感じとれない、生の語りからしか得ることのできない語りのリズム、息づかい、語りの構成などを感じとりました。それは、基本的には私がマックス・リュティから学んだメルヒエンの様式理論にまったく合致するものであることを知りました。これは私にとっては大きな驚^{おどろ}きでした。なぜならば、リュティはヨーロッパの昔話についての様式論をまとめたのであって、ほかの大陸のことについては私は知らない、とその著の序文（『ヨーロッパの昔話 その形式と本質』序説）で述べているのです。たしかに、日本はヨーロッパから見れば地球の反対側にあります。それ

なのに、いま日本にいる伝承的な語り手の語りが、ヨーロッパのメルヒエンの分析ぶんせきから生まれたりユティの様式理論に根本的なところは合致するということは、大きな驚きでした。

私には、幸いなことにもうひとつ大きな体験があります。それは、かつて稲田浩二氏いなだこうじと共同編集責任者になって行った『日本昔話通観』の資料編二十六巻の編集作業でした。私はこの仕事のなかで、モティーフ分析法を考案し、掲載けいさいされている典型話のモティーフ分析をして、それを「モティーフ構成」という形でまとめました。そのために、私はたくさんのお話を精密に読み、その構成を分析し、モティーフに分けました。そして、個別のモティーフの形にまとめあげる作業を十年以上もつづけました。分析した昔話の数はおびただしいものになります。この経験のなかで私は、伝承的な、それぞれの土地の言葉によって語っている語り手のなかにもいろいろな語りの癖くせがある、あるいは違いがあるということを知りました。ある人は非常に少ない言葉で語るし、ある人はたいへんおしゃべり好きで、たくさんのお話を装飾そうじやくをつけて語っています。しかし昔話の語りとしては、贅肉ぜいにくのたくさんついた長い長い語りより、スリムな、贅肉を落とした語りのほうがはるかに理解しやすいことは明らかでした。このモティーフ分析の体験からも、私は、リユティ理論でいわれていることの基本的な部分は日本の昔話の伝承的な語り手においても実現されていることを確信しました。

日本の伝承的な語り手からたくさんのお話を直接聞いた体験と、『日本昔話通観』のモティーフ分析の体験を通じて、日本の昔話には、その語り口かたぐちに、ある独特な特徴があるということも知りました。考えてみれば、話芸わげや芝居しばいでの日本語のつかい方を見ても、ジャンルによって語り口が異なっています。同じ話芸でも、落語の語り口と講談の語り口はちがいます。それぞれのジャンルが独特の語り口を築きずきあげて、それによってみずからの世界を作りあげているということがいえます。昔話もやはり、長年の伝承のあいだに、ある独特の語り口を獲得かくとくしているのです。

⑤ 以上述べた、私の三つの体験と、ジャンルによる日本語の語り口の違いという事実にもとづいて、昔話の語法論を展開してみたいと思います。

ところで、「昔話には独特の語法がある」という目で見ると、現在の日本で、昔話をめぐる状況じやうきやうにいろいろな問題があることに気づきます。昔話絵本とか昔話の再話本はたくさん出版されているし、幼稚園ようちえんや保育園、あるいは小学校でも、教材としてしばしば使われています。それらをいま述べたような「昔話の語法」という観点から見ると、⑥ 伝承されてきた昔話の語法とはかな

りちがったものがたくさんあることに気づきます。多くのものは再話者の文芸的好みによって文芸的装飾がたくさん加えられていたり、あるいは再話者の道徳観、教育観によって子どもへの道徳教育に役立つように手を加えられていたりします。そして語り口についても、昔話というジャンルがもっている語り口からはみ出して、創作文学の語り口をそのまま持ち込んでいるような場合が多く見られるのです。

私の目から見ると、昔話が本来もっていた姿ではない昔話絵本や再話本が、世間ではなんの疑いもなく、広く受け入れられているように思われます。それが、^⑦ 伝承されてきた本来の昔話から非常にはずれているということにさえ、ほとんどの人は気づいていないようです。私は、そのことを残念だと思います。なぜなら、昔話の独特な語法は、むかしの日本人が日本じゅうで何百年も語り伝えているあいだに、自然に昔話が獲得してきたものです。ですから、それをなるべくこわさない形でつぎの世代にわたすのが、現代のおとなの責任だと思うからです。

残念だと思うのは責任論からだけでなく、昔話という耳で聞かれてきた文芸は、その独特の語法のなかに美しさをもっているからなのです。それは、昔話のなかにしかない世界でしょう。創作の文学とはちがった、民族全体が集合的に作りあげてきた独特の美しい世界なので、それ自体が、貴重な民族の文化財だからです。

それで私は、伝承的な昔話の本来の姿とはなにか、ということをし正しく知ってほしいと思っています。長年にわたって昔話の様式論的な研究をしてきた一研究者の願いです。

考えてみると、そもそも伝承的な昔話にはある独特の姿がある、つまり独特の語法があるということは、^{いっぽんてき} 一般的にはまったく知られていないように思われます。それだから、伝承的な昔話とはかけはなれた昔話絵本や再話本があっても、それがかけはなれているということ自体に気がつかないで通用させてしまっているのだと思います。

伝承的な昔話の本来の姿を守って、昔話絵本や再話本を作ってほしいと願うのは、こういうわけです。いまでは日本のどこをさがしても、子どもたちがおじいちゃんやおばあちゃんから毎晩のように昔話を聞かせてもらうということはほとんどなくなり、子どもたちは、昔話絵本や再話本を通じてのみ昔話を知ります。だから、もし昔話絵本や再話本が、伝承されてきた昔話の本来の姿を失っていると、子どもたちにとっては伝承的な昔話はないことになってしまふのです。それはあまりに残念なことではないでしょうか。

創作的な昔話でもないではないかという意見もありうるでしょう。つまり、本に書かれた創作文学と同じようなスタイルであっても、「桃太郎」のストーリーがあったり、「花咲か爺」のストーリーさえあればいいではないか、という考え方もありうるでしょう。私は、そうではないと思います。耳で聞かれて伝承されてきた昔話は、耳で聞きやすいような姿になっているのです。それがこわされてしまうと、耳で聞きにくくなります。わかりにくくなります。子どもはそれを耳で聞かされたら、けつきよくあまりわからず、興味をもたないまま昔話から心が離れてしまうのです。

すると、こんどは耳で物語を聞くということにそれほど意味があるのか、という疑問がおきるでしょう。私は、物語を楽しむには、耳で楽しむことがまず大切だと思っています。今日では、文学とか小説とか物語などといういろいろな言葉で表現されますが、くくつていえば、言葉による物語は、ほとんどの場合、それは本のなかに印刷された活字として受け取られています。つまり、人は物語は目で読むものだと思っています。けれども、考えてみれば人類にとっては、文字が発明されるはるか以前から言葉はあったわけです。文字によって言葉が文章として書きつけられるようになったのは、人類の歴史からすればごくごく新しいことです。しかも、それが印刷されるようになったのはほんとうに新しいことなのですが、現在では物語といえはほとんど目で読んで受け取っているのです、人は目で読むものだと思いいこみがちです。

そこでふたたび冒頭の「昔話はどこにありますか」という問いにかえってくるのですが、人類の歴史を考えても、いま述べたように、まず音としての言葉があり、それから文字が発明され、それからやっと印刷が発明されて今日の形にいたっている、ということとは確かな事実です。

ひとりの個人の人生におきかえてみても、同じことがいえます。人間は生まれたとき、産声しか発することはできません。やがて、周囲の人たちの言葉を耳で聞くことによって、言葉を獲得していきます。二歳、三歳のときにはもうすでに、かなりの言葉をつかって親やきょうだいと話することができます。けれども、まだ文字は知らないでしょう。文字を習うのは、また二、三年後のことです。つまり、ひとりの人間にとっても、まず音としての言葉があり、耳でそれを楽しみ、それからやっと文字を読み、文字を書くようになっていくわけです。ですから、人間にとって耳で物語を聞くこと、楽しむことは、根本的に重要なことだと思います。その段階を抜きにして、いきなり文字で物語を楽しむことはできないのです。

そういう目で現在の日本の状況を見ると、耳で物語を楽しむという場面が少なすぎるように思います。文字を習うことが早け

れば早いほどいいと信じられているようにさえ思われます。しかし、文字を覚え、文字で物語を楽しむ前に、まず耳で物語を聞き、そして物語を楽しむ時間がなければならぬはずで、人類もそうやってきたし、ひとりの人間もそうやって成長してきたからです。この順序をくずすことはできないし、その順序は大切だと思えます。

私はその意味で、昔話という耳で聞かれてきた文芸が、いま子どもたちの耳に音としてとどけられることが必要だと考えています。その意味で、耳で聞かれてきた文芸は本来どういう姿をもっていたのか、具体的にいえば、どういう語りの法則をもっており、どういう語り口で伝えられてきたのかということを確認にすることが必要だと思つて、この本を書くことにしました。

(小澤俊夫『昔話の語法』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 — 線①「どこ」とありますが、筆者は「どこ」にあると言つたのですか。本文中より十五字以上二十字以内で抜き出して答えなさい。

問二 空欄(A)に入る最も適当な語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 音楽 イ 絵画 ウ 体操 エ 科学 オ 彫刻

問三 — 線②「昔話の文法」の「文法」とほぼ同じ意味で用いられている一語を本文中より抜き出して答えなさい。

問四 — 線③「昔話独特の言葉づかい」の「言葉づかい」とほぼ同じ意味で筆者が用いた一語を本文中より抜き出して答えなさい。

問五 — 線④ 「荒削りのよさ」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 荒っぽく激しい文章力

イ いぶし銀のような言葉の重み

ウ ありのままの語りの力

エ 中途半端で素朴な表現

オ 木の削りかすのような軽い言い回し

問六 — 線⑤ 「私の三つの体験」とはどのような体験を意味しますか。本文に書かれている順序で一つずつ説明しなさい。

問七 — 線⑥ 「伝承されてきた昔話の語法とはかなりちがったものがたくさんある」とありますが、このような状況になった

原因を筆者はどのように説明していますか。最も適当な一文を本文中から探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問八 — 線⑦ 「そのことを残念だと思います」について後の問いに答えなさい。

(1) 「そのこと」とはどのようなことですか。本文中の表現を用いて六十字以内で説明しなさい。

(2) 「残念だ」と筆者が思う理由を本文中の表現を用いて六十字以内で説明しなさい。

問九 本来の昔話を失わないために、筆者はどのようにすることが重要だと考えていますか。それが述べられている段落の初めの五字を抜き出して答えなさい。

問十 本文の内容として正しいものには○、誤っているものには×を答えなさい。

ア 昔話は、特別な口調、特有のきまり、個性的な形式、言葉の使い方といった四つの特徴を意識して研究していくべきである。

イ 幼い頃に耳を通して吸収した昔話は、自ら目を通して読んだものよりも人生においてははるかに大きい糧となる。

ウ 世界各地に昔話は存在するが、それらはその文化的特徴を反映しており、一つとして同じものはない。

エ 昔話には他の文芸とは異なる独特の話法をもっており、後世に伝えていく場合、この語法を決してくずしてはならない。

オ 内容が同じでも伝承されてきたもとの姿を失ってしまった昔話は、語られても子どもたちの心には残りにくい。

三次の——線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- | | | | |
|---|-----------------|----|-----------------|
| 1 | 強いカクシンを持つ。 | 2 | 電車のウンチンが値上がりした。 |
| 3 | ヨウサン業を営む。 | 4 | 面倒な仕事をケイエンする。 |
| 5 | ボウトと化した群衆。 | 6 | ダカイ策を練る。 |
| 7 | セイトウな王家の血筋を継ぐ。 | 8 | 健康をソコナう。 |
| 9 | 雨天で運動会をジュンエンする。 | 10 | シユウトク物を管理する。 |

令和三年度入学試験

二月一日(午後) 実施

東京女学館中学校



国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一

問二

問三

問四

問五

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問六

問七

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問八

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問九

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問十

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

二問一

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問二

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問六

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問七

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問八

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問九

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

問十ア

イ

ウ

エ

オ

三

9	5	1
10	6	2
7	3	
8	4	
う		

評	点



受 験 番 号

氏 名